

## 多摩産材について

東京の36%は森林だって知っていましたか？

たまのレジャーやドライブで東京の山に遊びに行ったとき、私たちが清々しい気持ちにしてくれる山々。自然がいっぱい、なんの問題もないように思えます。

でも実は、その山と木が今悲鳴をあげています。

それが多くの人を毎年悩ませる花粉症の一因にもなっているかもしれないとしたら？

私たちの生活に欠かせない水、空気に関係しているとしたら？

うーん、ただ事じゃありません。なにがどうしてそんなことになっているのでしょうか？

スギやヒノキは貴重な資源としてせっせと植えられ、人々の手で育てられていました。

戦後の復興期に木材が著しく不足し、外国から木材が大量に輸入されるようになりました。

安い外国材におされ国産材は売れなくなり、次第に山に手をかけられなくなりました。

そう、東京の山に生えている木のほとんどが人の手で植えられた人工林なのです。

良い木材にするためには、健康な森林であるためには、人の手で植えられた木は人が管理し続ける必要があります。スギが木の材料などに利用出来るようになるには50年程の歳月がかかります。その間、定期的な下刈り、枝打ち、間伐といった作業が必要です。しかし、今では原木価格が著しく落ち込み、そういった手入れを施すことが難しい状況です。

手入れされない山は荒れます。

木々が密生し、見上げれば密生した木々の枝葉が接触して林の中に光が差し込まなくなり、そうすると、草や低木が育たず表面の土が雨水で流れ、木の根っこが見えてきてしまいます。森林の持つ水源かん養機能や土砂流出防止、土壌保全、二酸化炭素の吸収といった環境保全機能は、行き届いた山の手入れと管理をすることで初めて発揮されるのです。

また、伐期を迎えたスギは成熟期でもあります。スギは成熟期を過ぎると花粉をたくさん飛ばすようになります。いま、山には成熟期を迎えている木がたくさんあるのですが、木材価格が下がっているため、伐り出すのもままならない状態なのです。

## 都の対策

森林は森林所有者のものですが、その環境保全機能の恩恵は都民全員が受けています。また、最近では花粉の問題などもあります。そこで、東京都はいろいろなかたちで森林整備を進めています。成熟したスギを伐採・搬出し苗木を植え、保育して新しい森林へ造りかえる主伐事業、伐採した木の搬出が難しい山の奥まで作業車やトラクタが入れるように作業道をつくる作業道整備事業、小面積のスギ林を伐採し、跡地にケヤキやヤマザクラ、コナラなどを植栽する色彩豊かな森事業などがあります。

## 多摩産材の利用促進を図る

山のお手入れができないのも、続く木材価格の低迷できちんと管理するだけのお金がまわっていないから。多摩産材認証制度は、そんな問題を改善するために設立されました。東京の多摩地区で育った木を『東京の木 多摩産材』として産地を明確にすることで、消費者がわかりやすく安心して地場産材を使えるシステムです。

まず、木の採れた場所が認証対象の森林であること。そしてその木の所有者(森林所有者)、その木を伐る人(素材生産業者)、原木丸太を売る原木市場、その木を製品にする製材業者までが多摩産材認証協議会に認定・登録されています。認証されている製品は納品書などに証明印が押され、シールが貼られています。



地産地消が叫ばれる昨今。家や家具など、身の回りにある木を使った製品も地場産材にシフトしてみませんか？そうすることで身近な森林が守られるだけでなく、そこに住んだり、使ったりする私たちにもいいことがありそうです。

東京の庭baum innen編では木が山で伐られて製品になるまでを追って、その手順やそれに関わっている人たちの姿を取り上げていきます。まあまあ、カタクルシイことは抜きにして、まずはご覧くださーい。

文／高橋 享子

